

基調講演

「海域の芸能や祭りの諸相—奄美・西海および日本海を中心に—」

笹原 亮二 氏（国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 教授）

1. 海と人々

最初に、海と人々の関係について一言触れておきたいと思います。海辺に住んでいる人々は海と非常に近い関係で暮らしてきたのだと私たちは思いがちですが、実際は必ずしもそうではなかったことは研究者がいろいろ指摘しているところです。桜田勝徳という民俗学者は、「海辺に接するところでありながら、海に背を向けるような気風がある」と言い、本当の漁村はむしろごく稀だと指摘する研究者もいます。それは歴史的に海と人との関わりが生じたことにも一因があるのだと、宮田登先生は指摘しています。宮田先生によると、漁村は中世末から近世において海産物が商品として流通するようになってから、人々が海に目を向け出した面が非常に大きいと言っています。



2. 島と芸能

それでは、海と芸能の関係はどうだったかという、例えば鹿児島島の薩摩半島の南にある硫黄島を思い浮かべてみると、絶海の孤島なので非常に閉じた世界であると私たちは考えがちです。実際、船から島を見ると、ここに人が住んでいるのだろうかという感じがするのですが、陰に入ると港があって人々が暮らしています。

この島にはメンドンと呼ばれる異相・異様の訪れ者が来ることで有名です。メンドンとは、八朔太鼓踊りの中に出てきます。旧暦8月の八朔（8月1、2日）に島内の熊野神社の前で太鼓踊りが演じられ、踊りの途中でメンドンという奇妙な姿形の者が登場するのです。八朔太鼓踊りは、芸能の歴史の中で見ると風流踊りの一系統になります。

実は太鼓踊りはそれほど珍しいわけではなく、九州をはじめ本州・四国にも非常にたくさん分布しています。同系統の太鼓踊りが島外各地に分布しているということは、メンドンが出てくる硫黄島の八朔太鼓踊りも島外から伝わったと考えられるわけです。島の太鼓踊りとメンドンの様相からうかがえるのは、芸能や祭りが海を介して伝わり、定着したということです。それともう一つ、今日はあまり触れないと思いますが、どんなに小さな島でも芸能や祭りが見られ、芸能や祭りが全く見られない島はそもそも少ないようなのです。この二つのことが思い浮かぶわけです。

3. 海と芸能

そこで、海と祭りや芸能の関係にどんなものがあるか、ざっと見ていきます。

三重県南伊勢町の贅浦という地域の浅間踊りは、海辺で踊ってから山の方に行って、また踊るという芸能です。

静岡県の熱海沖にある初島には、初木神社の鹿島踊りがあります。この神社は、漂着した初木姫というお姫様を祭っている神社で、海辺の御旅所に神幸してから海岸で踊ります。

それから、神輿が浜に下りる形も各地でよく見られます。香川県高松市女木島では、神輿と太鼓台が浜辺に神幸して海に入ります。熊本県天草の上深江という所にある八幡神社の裸祭では、浜下りというよりも海の中に神輿が入ってみんな泳いでいます。

船を使った祭りや芸能も各地で見られます。これも天草ですが、河浦十五社宮例祭では浜辺で神輿を船に積み込み、湾内を決まった形でぐるぐる回って沖の島にある御旅所に行くという、船による神輿の渡御が行われています。

神輿を載せた船の渡御は、各地で見られます。広島県の厳島神社の管弦祭では、神輿を御座船に載せて、対岸の御旅所まで行きます。島根県松江市の美保神社蒼柴垣神事も、神船（神様を乗せた船）を湾内で引き回し、船渡御が行われています。

神輿だけでなく、神輿に供奉する太鼓台の船による巡航も瀬戸内海辺りでは行われています。岡山県笠岡市の神島は、今では陸続きで車で行けるのですが、かつては島になっていて、太鼓台が各地から船でやって来ていたようです。

船が舞台になる芸能や祭りもあります。福岡県柳川市の沖端天満宮の大祭では、海ではなくてよくよく考えたら川でしたが、海に浮かべた船を舞台にして芸能を演じる場合もあります。愛媛県松山市の興居島という所の船踊りは、今では水上に浮かべた舞台で踊りを演じていますが、かつては船を2～3艘つないだ上で演じていたようです。その証拠に、船の舳先で祭事が行われています。船踊りの役者たちは、今でも船乗込をします。船乗込は、瀬戸内の島々では昔からよく見られたそうですが、今はあまり見られなくなったようです。大神楽や歌舞伎芝居、人形芝居の役者たちが、囃子を演奏しながら島々を巡っていたようです。瀬戸内海では小さな島でも祭りのときに芸能が行われているのですが、自分たちでやるよりも専門の芸能者が訪れて演じることが多かったようです。

和船の競漕もあります。長崎県壱岐の聖母宮例祭では「フナグロ」と呼ばれる競漕が行われます。岡山県笠岡市のオシクランゴも和船で競漕をしています。

船の形を模した山車や屋台も各地の祭りで見られます。これは必ずしも海沿いの地域に限ったことではありません。愛媛県四国中央市の三島神社や岡山県倉敷市の戸島神社の祭りにも船の屋台が登場します。

海辺でさまざまな芸能や祭りが行われるのはなぜかと考えてみると、従来から指摘されていることとしては、祭りの対象である神霊が海からやって来て、祭りを終えたら海に送ると考えられてきたためといってもいいでしょう。長崎県対馬市の和多都美神社は、満潮時に海水が入り込むので、神霊が海から来るといった雰囲気がよく分かります。伊豆半島の来宮神社では、海から寄り付いた御神体を祭っています。

また、精霊送りは海から迎えるのではなく逆に海へ送る行事で、お盆に精霊を送るのはしんみりした行事ですが、長崎の場合は爆竹を鳴らしまくるので、よそ者から見るとあまりしんみりしません。今はさすがに大きな精霊船を海に流すわけにはいかないのですが、

かつては流して神霊を海に送っていました。

広島県竹原市二窓では、小正月のどんど焼きを神明祭と呼んでいます。今は学校のグラウンドでやっていますが、昔は浜で行い、終わったら海へ流していました。これも祭った神霊を海の彼方に送るという意味合いだったのだらうと思います。

このように祭りの対象は、自分たちの生活する集落と海の彼方を神霊が行き来するという感覚を人々が持っていたと理解すると、沖にある聖地としての島のありようが理解されてくるのではないかと思います。

海の彼方を異界・他界と見なし、神霊が往来するという感覚が島を聖地としてあがめるようになったといえますし、今まで見てきたような海に関わるさまざまな祭りや芸能、汀での祭祀、漂着神の祭祀、海辺に御旅所を設置する慣習、あるいは海中渡御、精霊船を流すといった行事は全て、海の彼方を異界・他界と見なす感覚が基になっていると理解することもできるだらうと思います。

4. 奄美の海域の芸能と祭り

具体的に幾つかの地域の様子を見ていこうと思います。

まずは、奄美大島の平瀬マンカイと呼ばれる祭りです。奄美・沖縄では本州以上に海の彼方に他界があるという感覚が強いので、そこでの神霊の行き来を想定した祭りが行われています。この祭りでは、海の彼方から稲の穀霊を招いています。奄美・沖縄などの南の方では海に向こうに他界（ニライカナイ）があり、そこと現世の間を神霊が往来すると考えられています。

こうした奄美の島々の芸能を考えると非常に面白いのは、ヤマト系（九州以北につながるさまざまな民族文化）の様相と琉球系（沖縄につながる民族文化）の様相がせめぎあっている場所と考えられる点です。大きくは奄美大島の北で分かれるのですが、こと芸能に関して見ると非常に錯綜します。例えば、八月踊りは奄美大島でも各地で行われている芸能ですが、奄美大島の八月踊り系統の踊りは、奄美大島・喜界島・徳之島の3島にしか見られず、他の島では見られません。太鼓の形を見ると、奄美大島のものは木のくさびが太鼓の周りをぐるっと回っていますが、喜界島の太鼓は鉄の杵を紐で締める太鼓になっています。奄美の島々でこの二つに分布が分かれるのです。

シマウタと呼ばれる地域の歌も、奄美の島々ではひと色ではありません。奄美大島のシマウタに対して、沖永良部島のシマウタは三味線の弾き方も歌の音程も非常に異なっていて、ちょうど沖永良部島と徳之島の間で分かります。獅子舞は、奄美の島々でも沖永良部島以南にしかありません。

こういったさまざまな違いを見ていくと、ヤマト系と琉球系の境界線は複雑なものになってしまいます。これは多分、歴史的にさまざまな祭りや芸能の要素が両方から時代ごとに伝わり、それが積み重なった結果だらうと考えられます。

5. 西海～玄界灘の海域の芸能と祭り

九州西部の海域を見てみると、例えば五島では五島神楽と呼ばれる神楽が各地で行われています。仮面を着けない舞と仮面の舞からなり、殿様と非常に関係が深く、福江にお城があった五島藩の藩主との関係が非常に深かったようです。

同じ五島列島で上五島町の神楽も、仮面を着けない舞と仮面の舞で構成されています。その隣の平戸島の神楽も仮面を着けない舞と仮面の舞からなっていて、同じような形ですが、ここは平戸にお城があった平戸藩の領地です。五島神楽では獅子舞が演じられるのに対し、平戸神楽には獅子舞が全く見られません。というより、平戸島全体で獅子舞がほとんど見られません。

五島神楽の獅子舞は大神楽の系統ですが、1人で1匹を演じています。五島では獅子舞はシシコマと呼ばれていて、お正月に家々を巡って演じられますし、神楽の中でも演じられます。

五島では念仏踊りが各地で見られます。チャンココと呼ばれる福江島の念仏踊りやオーモンデーと呼ばれる嵯峨島の念仏踊りは、盆に家々や墓を巡って踊ります。念仏踊りも殿様との関係が非常に深く、お盆のときには城に行って藩主に見てもらい、庇護を受けてきました。平戸でも念仏踊りが各地で盛んに行われています。平戸島や的山大島ではジャンガラという念仏踊りが踊られています。

地域独自という感じがする芸能としては、メーザイテンというものがあります。上五島の有川という所で、正月14日の弁財天の祭りに鯨歌を歌いながら家々を巡ります。鯨を捕る漁師たちの仕事始めに由来する芸能といわれています。

このように五島の芸能と祭りを見ていくと、四囲が海という島の環境とそれぞれの藩領としての島の歴史が相まって、海域ごとに差異のある芸能と祭りの様相が形成されてきていることが見て取れると思います。

壱岐島に行くと、壱岐神楽というものがあります。壱岐島では神職の人たちが寄り集まって、各地の神社の祭りで神楽を演じていて、時期になると月に数十社で神楽が行われます。これも素面の採物舞と仮面の舞で構成されています。壱岐も江戸時代は平戸藩の領地だったので、藩侯が平戸で演じさせたりもしていました。壱岐では祭りの芸能といえばほとんどが神楽になってしまい、他の芸能もないことはないのですが、あまり見られません。

対馬では盆踊りが各地で行われていて、今もあちこちで行われています。盆踊りといっても、やぐらの周りをみんなで踊るのではなく、口説に合わせて若者たちが村の聖なる場所や家々を巡って踊るのです。かつては島内のほとんどの地域で行われていました。

命婦の舞という巫女舞も行われています。現在は数社でしか行われていないのですが、江戸時代の文献を見ると50人以上の命婦(巫女)がいたとされているので、各地で行われていたのだらうと思います。

ちょっと珍しいのが小母田神社の祭りで、元寇の故事にちなんでいるそうです。対馬は元軍にかなり傷めつけられたのですが、この祭りでは、元に対して島の侍たちが戦って退散させたことになっています。

このように見てくると、西海～玄界灘の海域では、小母田神社の祭りぐらいしか異国的な要素が見られる祭りは見られません。これは奄美などとは非常に異なる特徴だと思います。つまり、芸能の在り方が奄美とこの地域で違うということは、その海域が経てきた歴史の違いを芸能と祭りが反映しているといえるだらうと思います。

6. 西廻り航路と日本海海域の芸能や祭り

いよいよ日本海について少し見ていきたいと思います。まず隠岐では、中世の郷に由来

する広い地域から1カ所の神社に各地の人々が集まって行われる大規模な祭りが見られ、神事とともにさまざまな芸能が演じられます。例えば、武良祭風流と呼ばれる祭りがあります。かなり大規模で、御神幸、神相撲、陰陽藝、流鏝馬といったさまざまな芸能が行われます。水若酢神社の祭礼風流と呼ばれる祭りでもさまざまな芸能が行われます。玉若酢神社の御霊会風流では神幸や流鏝馬が行われ、馬が大活躍します。それぞれの地域が祭りのときにウマを連れてくるわけです。

隠岐では他にも規模の大きな芸能が行われています。国分寺の蓮華会舞と呼ばれる芸能は、舞楽由来ですが、地元のローカルな演目も演じられます。美田八幡神社の田楽では、田楽踊りだけでなく獅子舞や相撲も一緒に行われます。こういった田楽は他にも演じている所がありますし、かつて演じられていた神社もあります。

隠岐では、神楽も盛んに行われていました。神楽の場合、本州の中でも島根辺りが非常に盛んですが、共通する特徴もあります。仮面を使わない舞と仮面の舞で構成されている点や、莫塵を持って舞う舞は本州側でも盛んに行われていて、共通する部分もあるのですが、隠岐では祭りのときに神楽を演じるというより、元々祈祷として行われる性格を持っていたので、そこは本州側と異なります。その他にも配流者の芸能として、隠岐では蹴鞠や闘牛などが行われています。

隠岐の芸能の特徴は、中世以前に元々の形が伝来した芸能や祭りが目立つ印象を受けます。類似の芸能や祭りは、神楽を除くと本州側では見られません。神楽は本州側にもありますが、違いがあります。江戸時代以降、盆踊り・風流踊り・民謡・ダンジリなども伝わっていますが、あまり盛んな感じはしません。歌舞伎や人形芝居などはほとんど見られず、江戸時代の芸能伝承は希薄な印象を受けます。

ただ、隠岐にはダンジリが宇屋と崎村の2カ所に伝わっています。二つとも隠岐のダンジリですが、関西方面との関わりで伝わったという伝承があります。本州側にも、ダンジリは幾つか伝わっています。山陰側には3カ所にダンジリが伝わっています。いずれも江戸時代、大坂と西廻り航路でつながっていた場所なので、恐らくその関係で伝わったのだらうと思います。ダンジリは、関西や瀬戸内では非常に盛んな芸能です。

関西では布団太鼓・太鼓台などと呼ばれていますし、瀬戸内海でも各地で見られますが、関西から遠くなるにつれてダンジリは簡素な形になるそうです。そう考えると山陰や隠岐のダンジリは非常にシンプルな形をしているので、分布域の周縁部に当たるとは思いません。ということは、隠岐などでは関西から直接的に伝わったという伝承がありますが、やはり西廻り航路で伝わっていったと考えていいようにも思います。

西廻り航路と日本海海域の芸能や祭りとしても一つ思い浮かぶのは、松江のホーランエンヤです。船を櫂で漕ぐ御神幸・船渡御で、船の上に子どもたちが乗り、剣櫂・采振りなどの演技をして「ホーランエンヤ」という掛け声を掛けます。同じような特徴を持つ船渡御は、島根県江津の「ホーランエー」など山陰地方でも何カ所か見られます。

櫂伝馬といわれる船渡御は、瀬戸内ではあちこちに見られます。山口県上関町祝島の神舞神事では、やはり剣櫂・采振りが船に乗って、「ホーランエンヤ」という掛け声を掛けます。広島県大崎上島町の櫂伝馬でも御神幸のときには同じように剣櫂・采振りが船に乗ります。この場合は、漕ぐときの掛け声に「ホーオン（報恩）エイヤ（栄弥）」というふうには、めでたい漢字を当てています。

このように瀬戸内では非常に多くの権伝馬が見られます。広島県安浦町の神山神社大祭のように、樽の上に子どもが乗って調子を取って演じたり、鳥取市の賀露神社例大祭は別名「ホーエンヤ祭」といわれ、元々は海上渡御をする「御船曳き」を権伝馬がやっていたとされており、先ほど見た瀬戸内の権伝馬と共通しています。

そう考えると、権伝馬の分布は瀬戸内から鳥取辺りまで来ているのだらうと思います。そのことは守屋毅さんも指摘しているのですが、違いもあります。瀬戸内海側は権伝馬が面的に分布しているのに対して、山陰に行くと比較的広い地域に点在しています。これはやはり海を介した芸能の伝播・定着の仕方なののだらうと思います。

7. 能登の芸能と祭り

さらに北上して能登は、ご承知のとおりキリコの出る祭りが有名です。キリコも海と関係の深いところが少なくありません。海の中に入って練るキリコもあちこちで見られます。キリコだけが海に入るのではなく、神輿自体も海の中に入ったり、海辺で渡御したりするところもあります。海と非常に関係の深い祭りが能登には少なくないといえるでしょう。漂着神を祭った神社も少なからずあり、そのようなところの祭りではやはり海辺に神輿が浜下りしたり、神輿が海の中に入ったりすることがあるそうです。

能登では、船渡御も各地に見られます。七尾市中島町のウスズミ祭ではキリコが海上を渡御します。口能登の富山湾側は杵旗がたくさん集まる祭りがあちこちで見られますが、その杵旗も船に載せています。能登町の伴旗祭では神輿の載った御座船を先頭にして船渡御に付き従っています。中島町のお熊甲祭は、祭神（祭りのときに祭る神様）が朝鮮半島からの渡来であると伝わっています。これも日本海側、特に能登の特徴かもしれません。

非常に豪華で大きな曳山が出る祭りもあります。北前船などの寄港地として栄えた所では地域に経済力があつたため、このような形の祭りが行われるようになったと考えてもいいと思います。輪島市の御陣乗太鼓も、御神幸のときに太鼓山で演じられる芸能だったとされ、一説には佐渡の鬼太鼓と関係があるともいわれています。

能登には海上の渡御祭が多く、漂着神の伝承も多いので、祭りのときに神輿が海に下りたり船渡御したりするのは、神霊が漂着したときの様子を再現しているという解釈もできるそうです。お熊甲祭などは、異国からの祭神を祭っています。北前船の寄港地の繁栄や船主の経済力による祭りの大規模化も特徴です。

奥能登では「正月の訪れ者」という行事が行われています。輪島市ではアマメハギが行われていますし、同じく輪島市の面様年頭は子どもを脅すようなことはあまりなく、平和的に各家を訪れて主人と挨拶を交わします。

こうした正月の訪れ者は東北の日本海側でも見られます。有名なのはナマハゲで、家々を訪れて子どもを諭します。山形ではアマハゲもあります。ナマハゲ系（アマハゲ、アマメハギ）の呼称は秋田、山形、能登半島に点在しています。ナマハゲ系の呼称ではない訪れ者はもっと西まであるのですが、ナマハゲ系の呼称の訪れ者が秋田から能登半島ぐらいつままでに分布していることを考えると、日本海が何らかの形で関わった可能性もあるのだらうと思います。ただし、ナマハゲ・アマハゲなどは「自分たちは山から来たのだ」と言っていて、海とは関係がないような話もしているので、検討が必要な気がします。

8. 佐渡の芸能と祭り

佐渡では、鬼太鼓、大獅子、小獅子、田遊が行われており、能が各地で盛んに行われています。能は中世の芸能という印象が強いのですが、佐渡の能は江戸時代初期に金山奉行の大久保長安が役者を連れてきたことに始まるといわれているので、佐渡の能は近世の芸能といえると思います。中央では既になくなってしまった驚流という流派が演じられています。このほか祝福芸や大神楽も見られます。

佐渡の人形芝居は、1人の演者が1人を演じる一人遣で、地も義太夫節ではなく文弥節という別の浄瑠璃を使って演じています。それから民謡も盛んです。地芝居は佐渡にはあまりありません。

このように佐渡の芸能を全体的に見ていくと、隠岐と違って江戸時代以降に伝わって定着した芸能が非常に多いという印象を受けます。

9. 富山県域の芸能や祭りと日本海

いよいよ富山に入ろうと思います。海との関わりで富山県を眺めてみると、まず屋形船の巡行が特徴的で、エビス祭が一部の海沿いの地域で行われているようです。祭りなどで村中を巡回する屋形船は婦負郡に多いようです。

海上渡御・神事は富山県でも見られます。射水市新湊の西宮神社のボンボコ舞であるとか、黒部市生地のエビス祭は船に御神体や御霊を載せて巡行します。

たてもん祭りは、船を模した台座に提灯をたくさん付けて引き回します。昔は取れた魚を載せて回していたとも伝わっています。今はやっていないと思うのですが、昔は引き回しが終わった後で船に載せて沖合に行ったそうなので、やはり祭った神霊を海に送り出すという意味合いもあったのだらうと思います。今は魚津だけになっているようですが、かつては他の場所でもやっていたようなので、もう少し広がりのある地域的な祭りだった可能性もあるようです。

曳山祭も、海との関わりが見て取れる祭りです。射水市新湊の放生津八幡宮の曳山祭は、海から祭神を迎えます。放生津系の曳山は、港町に多く分布しています。富山市岩瀬のけんか祭は、曳山をぶつけて壊し合うらしいのですが、かつてぶつけ合いに勝った方が網の権利を取った名残なのだそうです。

滑川のネブタ流しは、柳田国男などが早い時期に「日本海側のネブタの南限」と指摘しています。ネブタ流し・ニブ流し・七夕流しは、魚津・滑川・黒部市など各地で見られるようです。作り物の船に精霊と穢れを載せて流し、睡魔などをはらったそうです。

日本海側のネブ流しは有名で、一番北は青森のねぶた、ねぶたです。秋田県能代のネブ流しでは、大きな灯籠の形をしています。秋田市の竿燈も昔はネブ流しでした。「風俗問状答」という18～19世紀ごろに書かれた書物によると、秋田の竿燈に「眠（ねぶり）流し」と書いてあるのです。絵の説明にも「ねぶり流し」と書いてあるので、実は竿燈という名前ではなくて「ねぶり流し」と呼ばれていました。こうしたものの南限が滑川ということになります。

民謡もあります。「古代神」「岩瀬まだら」など富山の民謡は、瞽女（ごぜ）さんが広めたものもありますが、やはり西の方から船乗りが伝えたようです。ただし、芸能や祭りと民謡の伝播・定着は少し違いがあるのではないかという気がします。民謡は海路を媒介と

して割と容易に伝播・定着します。要するに、歌える人が1人来れば「面白い歌だ」ということでその地域で歌われるようになるので、民謡は動きがかなり激しいようです。そういった民謡が盆踊りなどになっていく場合が多いです。

しかし、祭りや芸能の場合は、そう簡単に伝播しないようです。よそから芸能や祭りが伝わってきて、その地域の人々がそれを見ていいなと思ったとしても、それだけでその地域に定着するかというとは必ずしもそうではないようです。江戸時代は地域を支配する為政者側に許可を得なければならず、その許可が下りないと演じられないということもありますし、実は祭りや芸能を実行したり維持したりするには経済力がとても必要です。ですから、特に比較的規模の大きな祭りが今も見られるような地域では、こういった条件をクリアして初めて、よそから伝わった祭りが定着していったのだらうと思います。だからこそ、海を介した祭りや芸能、特に大規模な祭りは点在する形で分布することになるのだらうと思います。ただ、正月の訪れ者は少し違うので、他の経緯を考えなければならぬのだらうと思います。

とはいえ、今日お話ししたような各地の芸能を見ていくと、芸能や祭りが沿岸の比較的広い範囲に点在している場合、海が関与した可能性を少し考えてみてもいいのだらうと思います。特に瀬戸内と比べた場合、そういった印象を強く持っています。

駆け足になってしまいましたが、奄美から始まって、どうにか富山までたどり着きました。能登と富山に関しては、また詳しい話がパネラーの先生方からあると思いますので、そこで足りない情報などを付け加えていただければと思います。多少は皆さんが考える材料になれば非常に幸いです。

パネルディスカッション

「海と祭り—祭りから知る日本海—」

コーディネーター：秋道 智彌 氏（山梨県立富士山世界遺産センター 所長、日本海学推進機構 会長）

パネリスト：笹原 亮二 氏（国立民族学博物館人類基礎理論研究部 教授）
経沢 信弘 氏（郷土料理研究家）
松島 吉信 氏（富山県文化財アドバイザー）

（秋道） 県が主催する日本海学のさまざまなイベントに、日頃からご理解とご支援を賜り、心から感謝申し上げます。先ほど笹原さんから、海の祭りに対する基調講演を頂きました。この後、お二人から話題提供をしていただき、その後4人で日本海と祭り、富山と祭りの問題を考えていきたいと思っております。

最初は経沢信弘さんから、「日本海地域の祭り」ということで能登を中心にお話しいただきます。

「日本海地域の祭り—能登を中心に—」

経沢 信弘 氏（郷土料理研究家）



1. 能登のさまざまな奇祭

私は料理人であり、京都の歴史や料理を研究しています。主にお祭りで神仏にどのような料理をお出ししているのか、興味を持っています。

本日は、能登の祭りを中心にお話しします。能登半島は日本海の中央に突き出すように位置しています。古くから能登には人・物が行き来し、大陸からの影響も色よく残っており、来訪神・仮面・仮装の神々などの奇祭がたくさんあります。

その一つ、能登一宮の気多大社の鶉祭りについてお話します。鶉捕部という人たちが3人1組で、七尾市の鶉浦から捕獲した鶉を運びます。鶉を捕獲する人は、小西さんという方が代々世襲しています。地元の人たちは鶉を「鶉様」と言って手を合わせ、色やつや、大きさを見て、来年がどのような年になるかを判断します。鶉祭りのクライマックスでは、気多大社の神殿に鶉を置いて、向いた方角で吉凶を占います。最後は気多の海から放します。放した後、鶉は越後の能生に到達するといわれています。

能登町では、2月3日にアマメハギという行事が行われます。アマメとは、囲炉裏に長く当たっているとできる火だこのことです。つまり、怠け者を妖怪が脅す祭りで、子どもたちがお面をかぶって家々を回ります。似たようなものは新潟県村上市にもありますし、秋田のナマハゲ、宮古島のパーントゥという祭りとともにユネスコの無形文化遺産に登録されています。その他にも、山形のアマハゲ、福井県のあっぱっしゃなど、似たような祭りがあります。

そして、輪島市では面様年頭という祭りが1月14日に行われます。子どもたちが面様という夫婦神に扮し、榊を手に家々の玄関をたたいて回ります。面様は決して言葉を発しないことになっています。今年は約100軒を回り、私も一緒について回りました。

七尾市のお熊甲祭りは、久麻加夫都阿良加志比古神社で毎年9月20日に行われます。そのことから「二十日祭り」ともいわれます。先頭の猿田彦が先頭で太鼓と鐘を鳴らしながら踊ります。大抵は若者たちが一升瓶を抱えて酒を飲みながら無礼講で踊るお祭りです。中には能登の獅子舞の原型だという方もいます。

2. あえのことについて

そして今日のメインテーマは「あえのこと」という、奥能登の田の神様の農耕儀礼です。目に見えない神様をそこにいるようにしてお迎えする神事で、ユネスコの無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に登録されています。

「あえ」は饗応、「こと」は行事を指すといわれています。12月5日の「暮れ」のあえのことでは、田の神様を迎えるときのごちそうとして、ある家庭ではブリがメインになっていました。そして、秋に採れた野菜、赤飯、二股に分かれた大根、ハチメの焼き魚が出されます。家によって行事は多少変わりますが、田の神様は目が不自由であるというのは共通しています。御膳の箸は栗の木を使っています。

当主は紋付き袴で、田の神様を家に引き入れて挨拶をします。まずお風呂に入ってもらって食事をしてもらい、お下がりをみんなで食べるという祭りです。田の神様には神棚で正月を過ごしていただき、2月9日に「春」のあえのこととして神送りが行われます。

しかし、昔は紋付き袴も着ておらず、野良着でお迎えし、料理も普通の食事をお出ししていたと聞きました。やはり世界遺産に登録されたら紋付き袴を着なくては駄目だという

ことで、今はそのような格好をしているようです。田の神様は春になると田に向かいますが、あえのことでは「田の神・山の神交代説」は見られません。日本全国に田の神様はいて、大抵は山の方に帰っていくのですが、あえのことでは山には帰らず、家から田んぼに帰るのでしょう。

この祭りと同様のものがないか、富山県で調べてみると、黒部市宇奈月町下立に「おおべさま」という行事があり、目に見えない神様をもてなしています。また、富山市細入では「おくわさま」という祭りがあり、座布団の上に鍬を置いて、目に見えない神様をもてなします。大抵は酒ではなく甘酒を出して、家庭の近況を報告します。富山県では砺波などに結構残っていたようですが、今は紹介した2軒ぐらいしか残っていないようです。

3. 山伏の影響

どうもこの祭りには山伏が関わってきた形跡があります。彼らは芸能、音楽や祭りを伝えていく役をしていたと思います。

石動山という山が氷見市と中能登町の間、ちょうど越中と能登の間にあります。伊須流岐比古神社（天平寺）があり、五社権現とも呼ばれています。院坊が三百六十余りあり、加賀・能登・越中・佐渡・越後・信濃・飛騨の7カ国を知行国として4万3000石余り、宗徒3000人を擁した勅願の道場だったといわれています。しかし、廃仏毀釈によって滅び、ばらばらになっていったそうです。

その石動山宗徒（山伏）がどこに行ったのかというと、特に砺波平野には山伏寺が瑞泉寺の前に11軒もあります。つまり、坊主から神主になったわけです。石動山宗徒の活動により勧請された分霊社は、青森から大阪にかけて多く現存しています。石動山の五社権現の一つである梅宮の神事が、現在の高岡二上射水神社の築山神事と放生津八幡宮の築山神事に伝播したと聞いています。

石動山の山伏は、氷見の人々にとって恐ろしい存在でした。「泣く子も黙る石動法師（すずめ）」という言い伝えがあり、秋になると山から下りてきて農民に「米を出せ」と脅迫していたそうです。これがあえのことに影響しているのではないかと思います。

4. まとめ

この他に、キリコや曳山などの祭りや村々のお祭りも数多く残っています。祭りというのは、日常の生活を伝える場でもあったと思います。そして、祭りの主役はいつも若者たちです。獅子舞を回したり神輿を担いだりするだけでなく、男女の出会いの場でもあったと思われれます。「社殿より裏でにぎあう村祭り」という江戸時代の歌があります。裏で男女が交じり合うことで子孫繁栄となり、神様が喜ぶ。これが祭りの本質ではないかと思います。

最近、コロナで祭りが中止になっています。直会で一杯飲むのが楽しみなのに飲めませんし、祭りの伝承が途絶えてしまうのではないかと年配の方が悲鳴を上げています。第二次世界大戦のときも若者がみんな出兵してしまっただけでかなり途絶えたようです。今はその状態と一緒に90歳以上の年配の人たちが嘆いています。

祭りに行くと、特に能登では「一杯飲まないか、泊まっていけ」と言われます。ちょこちょこ調べるのではなく、泊まったり、じっくり膝を交えて酒を飲んだりすることで、本

当の祭りの話などが出てきます。

(秋道) 写真は、ご自分で撮られたのですか。

(経沢) そうです。祭りは全部行くようにしています。

(秋道) 続きまして、富山中心の祭りの話を松島さん、お願いいたします。

「海と祭り」

松島 吉信 氏（富山県文化財アドバイザー）

私は昨年3月まで県の職員でした。県教育委員会に約30年、知事部局に10年の計40年間、県にお世話になりました。私は大学では考古学を専門にしてきたのですが、仕事に就いてからは実際に富山県内各地を訪れて、祭りや行事をいろいろ見せていただきましたし、建造物や史跡の調査、合掌造りなどの世界遺産の仕事にも携わりました。現地へ行って、保存継承している方や地区の方々からもいろいろなことをその場でお聞きすることができました。また、そのような調査をするときには専門の先生方に随行していただき、実際の祭りや行事を見ながら解説していただくので、タダで講義を受けたようなものです。ですから、退職してからはその一端をこのような場で還元しています。

私の話ではまず、海から私たちが住まう場所へ神を迎え入れる祭りを4件紹介します。後半は、逆に人々が住まう所にいる神を海へ案内する、もしくは海にいる神を陸地から遙拝する祭りを4件紹介します。

1. 海から神を迎え入れる祭り

「魚津のタテモン行事」は8月前半の金・土曜、魚津市の諏訪神社を中心に氏子7町がタテモンという独特の作り物を引き回す、魚津だけに伝承されている行事です。タテモンは提灯を80～90個ぶら下げていて、夜はとても映えます。三角形をしており、お供え物を模したのではないかという研究もあります。

タテモンのもう一つの大きな特徴は曳山であることです。曳山には車輪が付いていますが、タテモンの足元はソリになっています。ですから、祭りの翌日、道路の上には太い痕が残っています。現在はアスファルトですが、実は以前は砂浜を引いていました。ですから、ソリだったのです。

タテモンの独特の形状は、船を模したのではないかという説も一時期ありました。恐らくヨットの帆をイメージされたのですが、ヨットは近代に日本に入ってきたものです。本当に帆をまねたのであれば、北前船のように四角くなるはずですが、ですから、帆をまねたとは考えられません。実はいまだに答えが見つかりません。

私自身、そのことを研究したことがあって、曳山を保存継承している団体の全国大会が魚津市で十数年前に開催されたとき、私は基調講演でお話ししました。そのとき、真ん中に16mぐらいの心棒を1本立てて、提灯を付けて引き回すと話したところ、翌日参加した方から、「諏訪神社の祭りなら、本来の諏訪の一本柱（御柱）と関係しているのではないか」

という大変示唆に富むお話を頂き、なるほどと思いました。

しばらくその説は頭の中にとどめておいたのですが、ユネスコ無形文化遺産に登録された際に魚津市でお話しする機会があったので、諏訪の御柱との関係を調べようと一時期諏訪に通って勉強しました。しかし、弱りました。御柱そのものが何なのか分かっていないのです。ですから、因果関係を導き出すことはできていません。心柱の長さが約16mなのは共通していました。ただ、御柱は山から引き出してくるのですが、引き出すときは1本でも、神社に据え付けるときは四つの角（四神）に据え付けるので4本柱なのです。ですから、現時点では魚津のタテモンと諏訪信仰を直接結び付けるのは難しいと思っています。いずれにせよ、これはユネスコ無形文化遺産にも登録された、県東部を代表する独特のお祭りです。

「放生津八幡宮の築山行事」は、旧新湊市の放生津八幡宮の境内の一角に築山（仮設舞台）を設けて行われます。幅6m、高さ3m、奥行き3mぐらいで、壇上には人形が並べられます。真ん中の姥神（おんば様）が主神です。9月30日に神様を海からお迎えするのですが、その神様が宿る場所がおんば様です。依り代（よりしろ）と民俗学ではいわれています。ここに神様がお座りになって、10月2日の一日中、氏子と一緒に町の中で生活し、夕方には海に帰られます。ですので、夕方には築山も片付けてしまいます。

これは海の神様を迎える築山行事ですが、富山県には山の神様を迎える築山行事もあります。それが二上射水神社の築山行事です。春に行われます。二上山の頂上に神様がいらっしゃるって、お祭りのときに築山に宿ります。このような祭りが富山県で2件も継承されています。これも全国的に珍しいです。富山県独特のお祭りだと思います。

「吉原の恵比寿祭り」は入善町吉原地区に伝わる祭りです。特徴は、神輿の代わりに屋形船と呼ばれる北前船を担いで村内を巡ることです。吉原神社の神様は北前船に宿り、引き手と一緒に村々を巡り歩き、夜に帰ってきて吉原神社に宿る設定になっています。屋形船は江戸時代の後期、近くの船大工が奉納したものです。以後、これを担いで祭りをするようになったことが分かっています。

「生地たいまつ祭り」は黒部市生地の新治神社の秋祭りです。この行事も独特で、恵比寿様・大黒様という海の神様を屋形船に乗せて、町内を神輿と一緒に巡行するのですが、神輿だけが深夜、新治神社で火渡り神事を行います。たいまつが燃えている中を神輿が走り抜けるという独特の祭りです。古い文献によると、真夜中の2時から開始して夜じゅう行われていたそうです。しかし、私が現地調査を行ったところ、たいまつそのものは朝までずっと燃えています。夜9時か10時ごろに始めて2時か3時ぐらいに終わっていました。真夜中に行われる行事ということではこれも特徴ある祭りだと思います。

2. 海の神を拝礼する祭り

ここまでは、海にいる神様を氏子が住む集落へお迎えした祭りでしたが、逆に海へお送りする、もしくは海を拝む祭りを四つ紹介します。

「滑川のネブタ流し」は、7月31日に行われるのがミソです。いわゆるネブタ行事と考えられています。富山県の方言で「ねぶたい（眠い）」と言いますが、青森県で行われている「ネブタ」も語源は同じで、眠気を追いやる行事です。戦前、柳田國男先生が「眠流し考」という大論文で、東日本一帯に伝わる眠流しの行事をまとめられました。その時点で、

滑川に伝わるネブタ流しが一連の行事の南限ではないかと指摘しています。そのようなこともあって、国指定の重要無形民俗文化財となっています。

各町内が作った大きなたいまつに火をつけて海に流す行事です。たいまつにはナスやキュウリを人型に細工して取り付けたり、色紙で飾りを付けたりして流しています。現在は行われていないかもしれませんが、かつては病気した人の衣類なども中にくるんで流したそうです。

ネブタ流しは、富山県でもう一つ傳承されています。黒部市中陣地区のニブ流しです。海ではなく、川に麦わらで舟を作り、眠気を押し込めて流す行事です。日本に伝わるネブタ行事の南限が富山県であることをぜひ今回、頭の中に入れていただければと思います。

新湊地区には特異なお祭りが非常に多いのですが、「新湊のボンボコ祭」もいまだに起源が分からない祭りです。「ボンボコ」は、お囃子の音がそう聞こえることが由来のようです。舞人は天狗という設定で天狗面をかぶっていますが、鼻は高くありません。胸当てを着け、弓矢を持ち、背中に矢を背負っています。この行事は新湊の西宮神社で傳承されており、春に行われます。

まず、お宮さんで神様を海に送り出す行事があり、そこでボンボコ舞が行われます。次に、神様を船に乗せて海へご案内します。そのときはボンボコも随行します。海でおはらいし、そこでもボンボコ舞が行われます。陸に帰ってきて氏子の家に行くと、そこでもボンボコ舞を含む一連の行事が行われます。以前は西宮神社の春祭りで定期的に行われていたようですが、現在は残念ながら不漁の年に大漁祈願を行う祭りとして不定期開催になっているようです。

「唐島祭り」は、氷見市の光禪寺という曹洞宗のお寺で5月3日に行われる祭りで、寺に祭られている弁財天を船に乗せて唐島へ案内します。そのときには地元の獅子舞も盛大に繰り出されます。なぜ唐島に弁財天をお持ちするのか、調べてみると、ある事件がきっかけでした。唐島のほこらには元々、弁財天が祭られていたのですが、県外の漁師が弁財天を何かの理由で持ち帰ってしまい、唐島に神様がいない時期があったようです。その後、幸いなことに昭和30年代、再び弁財天が氷見に戻ってくることになり、それを記念したのがこの行事のようです。弁財天は、普段は光禪寺で安置し、祭りのときに唐島へ渡っていただきます。このような祭りが現在でも繼承されているわけです。

「起舟」は、漁村の正月行事です。農業では1月15日前後を小正月と呼びますが、漁業では2月11日がそれに当たり、大漁祈願祭が行われます。それが起舟です。「きしゅう」「きしょう」「きっしょう」など複数の呼び名あります。現在は形態がかなり変わっているようですが、一年の安全と大漁を祈願しています。これもだいぶなくなってしまったようですが、かつては富山湾沿岸の各漁村で繼承されていたようです。

ディスカッション

(秋道) ゆっくり聞きたいのですが、祭りの数も多いだけに、全部やっていると大変なことになってしまいます。ここからは笹原さんも含めて4人で話したいと思います。まず笹原さん、非常に多くの事例をありがとうございました。何年ぐらいかけて調査なされたのですか。

(笹原) ビデオや写真はアナログ時代のものも入っていたので、デジタルカメラが一般化する前のものもありますね。一番古いものは1980年代末ですから、30年ぐらいです。

(秋道) 特に、ユネスコ無形文化遺産になった事例が随分出てきました。例えば2009年の「奥能登のあえのこと」、2016年の「山・鉾・屋台行事」、2018年の「来訪神（仮面・仮装の神々）」には、富山県の例が入っています。笹原さんは、祭り与世界遺産の関係についてお仕事をされたことはありますか。

(笹原) 全くありません。

(秋道) 3、4日続く祭りもあるでしょうけど、大体は1年に1日でしょう。そう考えると、日本人にとって祭りは1年に1回ですね。笹原さんはどのような研究目標を持って、全国のさまざまな祭りを見てみようと考えられたのでしょうか。

(笹原) 最初からそう思っていたかどうかは置くとして、私は日本各地の祭りや芸能のごく一部を見た程度なのですが、祭りや芸能が全くないコミュニティは少ない気がします。今やっているかどうかは別として、小さな地域でもそれなりに祭りや芸能は存在しているのです。祭りや芸能は人々の生活にとって切実ではないものと考えられがちですが、そうではないのではないかと思うようになりました。しかし、祭りや芸能の形が地域によってさまざまであるということは、地域の人々にとって切実さもそれぞれ異なると思っています。

そうしたものを含めて、共通のものを考えようと思い始めています。最初からそう考えていたわけではなかったのですが、見ていくうちにそう思うようになって、いまだにここでこんなことをやっているのかという驚きが多いという感じです。

何を祭り、何を送り、何を迎えるのか

(秋道) いわゆる人類学、民俗学、歴史学は、世界各地、日本各地のさまざまな現象を捉え、それにどんな意味があるのか、現地調査で詳しく調べていくわけです。祭りの中で何が出てくるかという構成要素と、どういったものが振る舞われるか、何を目的でやっているのかを見たら、非常に多くの事例が出てきます。私は専門家ではありませんが、恐らくそうではないかと考えてきました。そこで、祭りをこの富山で考えるに際して、幾つかに整理してみましよう。

一つは、祭りの持っている祝祭的なハレの感じですね。神輿を担いで、太鼓をたたくような音があり、きれいな衣装があり、踊りがあるという場面とともに、宮司や権禰宜、祝部、氏子総代が集まる儀礼の部分もあります。そこで問題提起したいのですが、何を迎えて何を送るのかといったときに出てきたのは、海や山の神様でした。そこで神様の話をお願いしたいのですが、経沢さんは先ほど「田の神様は山に行くのではない」とおっしゃいましたね。

(経沢) 能登には高い山がなくて、大体 500m 級の山です。だから、田んぼから家に帰って、また田んぼに帰っていくといわれていて、田んぼの地面にずっといるから、モグラと一緒に目が見えなくなっていくのだという話を、現地の民俗学者から聞きました。

(秋道) 目が不自由なので、来られたら富山湾で取れるハチメをお供えするのですね。

(経沢) ハチメは目が大きいですから、焼物としてお出しします。送るときも迎えるときもハチメを使います。

(秋道) 桜井徳太郎や柳田國男などの日本の民俗学の大家の説では、山の神が下りてきて田の神になり、秋になると山に帰るといわれています。あえのことの神事はどう解釈すればいいでしょうか。

(笹原) 難しいですね。田の神が山の神になるというのは、田畑を実際に耕作している人から直接聞いたことがあるので、そういう場所もあるのだと思います。しかし、能登の場合はそうではないのでしょうか。山は必ずしも高い所ではなくて、いわゆる里山などの木が生えている所を山という地域も結構多いのです。ですから、生活領域外を山と考えれば、日常的な生活の場や耕作地とそこを神霊が行き来する場合も多いように思います。

(秋道) そうですね。地形的な特徴や環境に関わるのでしょうかね。松島さんは先ほど、海からお迎えするものと山からお迎えするものが富山県内にあると言われました。今の話と結び付けたらどういうことになるのでしょうか。

(松島) 今のは築山についてのご質問だと思いますが、一つ戻って秋道先生から、何を祭るのか、何を送るのか、迎えるものは何なのかという質問があって、経沢先生はあえのことについて触れられました。それに関連して考えるヒントを紹介します。黒部市下立地区に伝承されている「田の神迎え(おおべさま迎え)」です。ここ数年調べていませんが、現在はひょっとしたら途絶えている可能性があります。ここで何が行われていたかという点、能登のあえのこととほとんど同じです。違いは、能登のあえのことのお迎えが 12 月、お送りが 2 月なのに対し、富山県の田の神行事はお迎えが 11 月、お送りが 1 月です。

問題は、何をお迎えするかです。下立地区の神様は富山地方鉄道の電車に乗ってきます。ですから、地鉄の下立駅までお迎えに行きます。地鉄が開通する以前は黒部までお迎えに行っていたそうです。では、どこからいらっしゃるのかというと、神様は実は出稼ぎに行っています。出稼ぎ先は能登、北海道、東北などです。近世末から近代中頃にかけて、「能登通い」といって、小型の船で盛んに能登地域と交流し、塩や薪炭、アテの木などの能登の商品が富山の経済を潤しました。

それから、北海道と行き来していたのは越中衆です。北海道へ昆布を取りに出稼ぎに行っていました。その人たちが帰ってくるわけです。東北地方にも出稼ぎに行っていました。つまり、下立地区の田の神迎えの神様は、能登と違い、実は商売の神様(恵比寿様)なの

です。それで、正月に戻るのですが、行われる所作は全く同じです。神様をお迎えしますが、神様はいません。神様がいるふりをして、提灯で自宅まで案内し、お風呂や食事を召し上がっていただき、月が明けて旅立たれるまで家でお休みいただきます。お送りも同じようなことをして、「1年しっかり稼いで来てください」というふうに送り出す行事なのです。

ですから、何を迎えるかということ、本当に住まいする人々の生活や生計と密接だったのではないかと思います。そういう意味で、能登のあえのことも解釈の一つにつながると考えています。

(秋道) 「おおべつさま」という名前が恵比寿様と似ていることから、今の説明はかなり説得力があると思いました。

中世から近世にかけて、日本国内では多くの飢饉が起きました。今は海外から輸入して何でも自由に入る時代ですが、安定同位体を使って木の年輪を調査した名古屋大学の先生の研究によると、気候が寒冷化して、特に加賀藩で飢饉が発生した事例が記録によく残っているそうです。そのとき何が起こったのかということ、加賀藩の農民が能登に逃げて漁民になりました。漁民の方が日銭が入るからです。そうしたいきさつもあって、今のように能登や富山が密接につながっているということは、他の民俗事例や歴史事例でもあることです。あえのこのような神事でも、多様な形態があったのだというのは大変勉強になりました。

神の依り代

(秋道) 続いて、三角形のタテモンの話がありましたが、これらは何を象徴しているのかということ、天孫降臨といって、天から神が下りてきて厄よけをするときに山の頂上に宿る、依り代になるという日本民俗学の考え方があります。京都の上賀茂神社の境内の裏に神山という 300m ぐらいの山があるのですが、そこに神様が降臨して神社に来られたといえます。

國學院大學の笹生さんによると、「天孫降臨説は、折口信夫が近世以降の考え方に密着して、天孫降臨のような民俗学的な考え方にシフトしたことで生まれたものであり、神様は元々その場にいた」と言っています。例えば、沖ノ島の宗像三女神は降臨したのではなく、岩のどこかにずっといたという解釈を笹生さんがしているのです。それについてどう思われますか。民俗学と古代宗教学の意見の違いが、今日の話に出てくる現象を考えると、にも随分関わると思うのですが。

(笹原) 神霊は、この世ならざる超自然的な力を持った存在ですね。つまり、神霊を祭るときには必ず祭りの場に呼び込む過程があるのです。神社でも祭りのときにのぼりを立てます。お盆でも迎え火をたき、特別な祭壇を作って、ご先祖様の霊を呼び込むわけです。そう考えると、常にどこかにいると考えることには無理があるような気がします。

高い所によりつくという話としては、例えば奈良の大宮神社は山が奥宮のようになっていて、大宮神社に限らず山の頂上は大体何かが祭られています。何もない自然の高まりは、

日本国内にはほとんどないと思います。高い所に神霊がよりつくと考ええると、祭りのときにのぼりなどを高く掲げる意味をそこから類推してもそんなに不自然ではないでしょう。折口の依り代の考え方も、何かが依り代になるというよりも、高い所に掲げたもののでっぺんが依り代なのです。山であれば、山の頂上にある木が依り代になるわけで、山全体が依り代ではないので、必ずしも近世以降の考え方云々ではないような気がします。それよりも宗像三女神との関係でいえば、山上他界か海上他界かという問題ではないでしょうか。

(秋道) 分かりました。今度は他界観の話になるわけですが、山上他界というのは、人が死ぬと死霊は山に行き、しばらくすると祖霊になるという民俗学者・桜井徳太郎の考え方です。特に沖縄の沖永良部島辺りでは、死んですぐには祖霊にはなりません、しばらくしたら祖霊になるなど、いろいろな民俗事例があります。笹原さんは奄美や能登半島から男鹿半島まで訪れているいろいろな多様性をご存じですし、民俗学のいろいろな蓄積がありますけれども、やはり富山から飛び出さないと見えてこない面もあるかもしれないということだと思います。

もう一つ質問したいのですが、祇園祭の山鉾の先頭は長刀鉾でしょう。鉾やダンジリのでっぺんには松の枝が付けてあります。あれも山の頂上のような発想で、そこに何かが下りてくることを象徴的に表す道具立てと考えていいのでしょうか。

(笹原) 元々はそうだったのではないのでしょうか。山と鉾は外から見れば形が似ています。なぜ鉾かという、鉾は下から鉾柱が1本通っていますし、山は作り物があって、そこに松があります。だから、やはりでっぺんに神霊がよりつくという考えが両方とも元になっているのだと思います。

ただ、祇園祭の場合は歴史的に複雑で、祭神自体は神輿で別に動いています。だから、それとの関係も出てきているし、時代時代でさまざまな意味が重層的にくっ付いているので、簡単には言えません。でも、依り代的な発想が山鉾の下敷きになっていると思います。

(秋道) 確かに飾り物はそのような意味がかなり多いでしょう。例えば節分で、ヒイラギとイワシの焼いたのを家の前に置くでしょう。家の玄関で悪霊や鬼を追い返すという空間的な意味と、垂直の意味がいろいろ複雑に絡んでいると思います。

それでは、皆さんから誰かに質問はありますか。

能登の食文化の特徴は？

(松島) 経沢先生は食事の専門家です。今回、能登のことをいろいろお話しいただき、祭り行事で大変独特のものがあることが分かりましたが、食べることにに関して能登には特徴があるのでしょうか。多分あるのではないかと思いますし、富山県との関係も何かありそうな気がするのです。食べ物の面でお話を聞かせていただけますか。

(経沢) 特に穴水や珠洲にかけて、同じ富山湾で魚も料理も一緒ですし、野菜も質がとてもいいです。珪藻土という七輪の原料になる土壌があって、ワインやブドウも素晴らし

い。私は能登に毎週通っているのですが、富山湾に劣らないぐらい能登がいいと思っています。

しかし、今は祭りの料理を作る人がほとんどいません。みんな料理屋から仕出しを出してもらっているから、もう駄目だなと思っています。年配の方もお宮さんやお寺さんに一切行かないのです。お祭りのときには、大学生などの若手をいろいろなところから連れてきて支えている状態で、いずれなくなっていくのではないかと大変心配しています。

(秋道) 仕出し屋はあるのですね。

(経沢) 普通の料理屋です。富山であれば報恩講料理のようなものを作っているところはほとんどありません。料理屋から仕出しや弁当を持ってきます。

(秋道) 柳田村であれば焼畑で何か作らないのですか。

(経沢) 人口が減少しているので、ありませんね。あえのこの料理にしても、近所のレストランで作って持ってきて振る舞っています。

(秋道) 二股の大根はどうなのですか。

(経沢) あれは農家が持ってきます。あれはよく見られます。

(秋道) 米俵が3俵ありましたが、3俵に意味はあるのですか。

(経沢) 田の神様だからだと思いますが、能登は元々、米がほとんど取れない所で、出稼ぎや貿易で生計を立てた人が多いのではないのでしょうか。

(秋道) 輪島は海産物がありますね。

(経沢) 干物があります。しかし、外海よりも富山湾の魚の方がいいです。外海は荒れたら漁に出られません。すぐに船が止まってしまいます。この間も1週間から10日、漁に出られませんでした。しかし、富山湾は防波堤のようになっていて、多少荒れてもすぐに出られます。

山と海の連関で日本海学を考える

(秋道) 笹原さんからお二人に質問はありませんか。

(笹原) 今回、秋道先生からテーマを頂いて、限られた地域ではありますが、今まで集めた資料を整理してみると、今日のシンポジウムの市長のご挨拶に「日本海は一つ」というお話がありましたが、どうも一つよりも少し分かれるという気がしてきました。越前、

若狭、小浜辺りから能登半島までを境に、西と東（北）側に分かれるのではないかという気がしてきたのです。

例えば、ダンジリや權伝馬が能登まで伝わっていなかったり、訪れ者は福井などにもずっとあるのですが、アマメハギ系の名前の訪れ者は能登半島で止まりますし、日本海側のネブタも富山辺りで止まります。どうも能登半島辺りを境に西と東で歴史的に異なる状況にあるのではないかという気がしてきました。歴史学などでもそのように言っている人はいます。関西から琵琶湖を通過して小浜辺りに抜けて北に行くルートはかなり昔からあったけれども、そういう陸路がありつつ海がある世界と山陰の世界では、日本海側といっても異なるように思いました。そのあたりは、能登や富山の民俗文化に詳しいお二方から見ると、どのような印象を持たれるのでしょうか。

（松島） 大変大きなテーマを頂きましたが、答えにはならないものの、ヒントになることは幾つかあります。小浜ルートは大変重要です。江戸時代後期（文化・文政年間頃）、北前船が出来上がりました。北前船は大坂と北海道を結ぶ西回り航路を通ります。そこで初めて、北海道から大坂まで直通で物資を運ぶことができました。それ以前は、小浜・敦賀ルートを使っていました。例えば1600年代前半、加賀藩初代から3代目の頃、年貢米を大坂に運ばなければならなかったのですが、試験的に海路を使って小浜まで船で運んで陸揚げし、琵琶湖へ運んで船に載せて、京都を通過して大坂へ運ぶことに初めて成功しました。以後、敦賀・小浜を通すルートは非常に重要になりました。ですから、そこで一つの歴史文化の境目があると考えても間違いではないと思っています。

以後、経済面だけでいえば近世後期（1800年ごろ以降）、日本海と瀬戸内海を通過して大坂まで物資が運ばれるようになり、その関係で東日本から西日本の日本海側にかけて、汎日本海側的な文化が広まったと大まかにいえると思います。

それに関連して紹介しますと、獅子舞でも独特の海との関わりが見られます。魚津市金山谷、上市町東種、上市町伊折の三つの集落はいずれも山間部なのですが、そこで現在も伝承されている獅子舞は対岸の氷見市型の獅子舞なのです。魚津や上市では2人で行う獅子舞が一般的ですが、大勢が演じる百足獅子舞で、獅子あやしや天狗が行うという氷見の獅子舞が山間部にストレートに入っています。富山湾を経由して、何らかの経済的な理由ではないかと思いますが、直接的に民俗文化が伝播している面白い例です。

次に、北前船に関連して民謡の「まだら（馬渡）」に注目しました。まだらは九州北部にある小さな島です。そこで伝承されている「まだら節」という民謡が日本海沿岸に分布しています。「めでためてたの若松さまよ」というフレーズが入るため、「めでた節」ともいわれます。山形の「花笠音頭」もその一つです。富山県でこれに類するものは、「まだら」と付くだけでも「岩瀬まだら」「新湊めでた」「魚津まだら」など多数あります。音階分析からアプローチを行った富山大学の中村義朗先生の研究によれば、五箇山の「麦や節」もまだらです。日本海ルートを通じて五箇山まで民謡が伝わり、独特の発達を遂げて、元歌が分からないくらいに変化してしまったものの、音階を調べていくと元歌が同じであることが分かってきました。

鱒分け神事は富山県の正月恒例行事であり、射水市の下村加茂神社で伝承されています。1月1日に加茂地区の方が集まり、6匹のブリが神社でさばかれます。そして、六つの地区

の住民に等分に分け与えられるという奇祭です。なぜこのようなことが加茂神社で伝承されているのか、さまざまな見解が出されていますが、いまだ解明されていません。ただ、富山県民にとっては正月の大変めでたい行事で、一年の幕開けを告げる大きなニュースとして生活の中に染み込んでいます。

(秋道) 北前船の話で面白かったのは、山の上まで行っているということは神通川を経由しているのではないかということです。神通川自体、どこまで分かりませんが。

(経沢) 民謡のところで出てきた「麦や」とは、そうめんのことです。能登はそうめんの一大拠点であり、五箇山は政治犯が流罪される場所でした。能登出身の遊女が流罪にされた「お小夜伝説」が輪島や門前と五箇山に残っており、その女が「麦や節」を伝えたといわれています。合掌造りを造ったのも、石動山の麓に住む大窪大工の人たちです。獅子舞も氷見と同じ獅子舞をしていますね。「こきりこ」もその辺から来たのではないかと考えていますが、はっきりしていません。

(秋道) ありがとうございます。日本海学ではあまり大きく考えてこなかった山の問題や川の問題を、相互作用を含めてもう少しダイナミックに考えた方がいいのかもしれないね。『あゝ野麦峠』で信州に塩ブリが運ばれたということだけではなくて。

質問なのですが、鰯分け神事はいつも6匹なのですか。6匹なのは氏子の数と関係するのでしょうか。

(松島) 私も不思議に思って調べたのですが、明確な答えは分かりません。ただ、6地区に平等に与えるという考え方もかもしれません。しかし、それなら6匹を平等に分ければいいのですが、平等に分けないのです。2匹だけ分け与えて、残り4匹はお宮さんで処理するらしいのです。ですから、平等の考え方も成り立ちません。ただ、6地区であることは間違いないので、それで6匹と強い因果関係があるのではないかというぐらいしかいえません。

(秋道) 確証がないとおっしゃいましたが、鰯分け神事の加茂神社は、京都の下鴨神社と関係しないかというのを以前読んだことがあります。下鴨神社の社領(荘園)が全国にあり、そこから物を京都まで運ばせていました。一番いい例が、琵琶湖の安曇川で取れたアユは、必ず上賀茂神社の神饌になるのです。それから、葵祭のときには干したトビウオを神饌として供えます。「それは上賀茂神社の荘園だった所から来ているのですか」と聞いたなら、「小浜辺りかもしれません」という答えが返ってきました。先ほどの話と結び付けると、日本海を通じたいろいろな交易の話で氷見と五箇山が出ましたが、京都まで行っていた可能性もあります。そういった枠組みも残しながら日本海学を考えると、山と海の連関も面白くなると思います。

まとめ

(秋道) 先々週、国際日本文化研究センター元所長の小松和彦さんと京都で対談をしました。海は漂着神や大黒さん、恵比寿さんなど縁起のいいものが来るという発想があります。漁民が軽石を拾って恵比寿さんとして祭る所が伊豆半島などにもあります。日本海ではどうかというと、必ずしもいいものだけが流れてくるわけではありません。一番怖い例が北朝鮮の拉致問題です。また、入善でよく取れるリュウグウノツカイは、魚津水族館に剥製があるのでご覧になった方が多いと思いますが、江戸時代に描かれたアマビエにそっくりです。ですから、異界からやって来たものが悪さをする、いいことだけをもたらすわけではないという意味で、コロナの災禍もその一つのように感じます。

その中で、日本海のシンポジウムを開いているわけです。時代性を踏まえて考えると、地元の食材を生かして、地元の若者が参加する祭りを近い将来復活させて、コロナに打ち勝つ地域力のようなものを、富山のどこでもいいので発信していただけるとうれしく思います。そのときにいろいろな連携が可能です。能登や五箇山、いろいろな連携を通じて地域の活性をしていただきたい。いくらお金を積んでも、やる気がなければ駄目です。オミクロンの災禍の中でこのようなシンポジウムを開いたわけですが、取りあえず祭りを復活する、あるいは継続するという未来への一筋の明かりを地域の皆さんでお考えいただければ、協力する人が出てきます。ネットを通じてできればいろいろと出てくるでしょうし、クラウドファンディングもあります。そうしたことも考えていただければと思います。

長丁場でしたが、今年度の日本海学シンポジウムをお開きとさせていただきます。ご清聴いただき、ありがとうございました。